

Levi

asabuki

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「進撃の巨人」の兵長の少年時代。前中後篇にて完結。初体験について言及あり。二次創作に理解のない人はご遠慮下さい。

ハーメルンさま内 a s a b u k i 名義で「M i k a s a」もあり

目次

| | |
|--------------------------|----|
| Levi (前篇) 「進撃の巨人」兵長の少年時代 | 1 |
| Levi (中篇) | 11 |
| Levi (後篇) | 21 |

Levi (前篇) 「進撃の巨人」 兵長の少年時代

Levi (前篇)

人類が壁の中にすんでいるというのなら、俺は街のごみ溜めに棲んでいた。狭くて汚くて騒々しくてしみつたれている貧民窟だ。

林檎一個盗むのに、肉片一切れにありつくのに、ありたけの神経を尖らせて、じつと機会を窺う俺みたいな路上の子どもを人は「汚い」と云って避けた。当たり前だろう。俺でも忌々しくなる、俺のことだが。

雨が降ると少し嬉しくなった。雨がこの街のくそ忌々しさを洗い流してくれる。服を着たまま土砂降りの中突っ立って、消える消える、と俺は打ちつける雨に祈った。人類のことじゃない。

俺の中に巣食っている何かだ。どんな室内の隅っこにもあるだろう。つまんだ埃みたいな煩わしい何か。

大きくなると俺は死んだ母親が娼婦だったと知った。なるほど。それで「少しの間、外に行っておいで」だったのか。

少しの間外に行っておいでと云われたら、おとなしく俺は菓子でも握らされてその室の外にいた。建物の入口の階段にぺたりと座り、通りを行きかう人間どもを何かの芝居か影絵みたいに眺めていた。

建物から出てきた男の足が俺のそばを通り過ぎて階段を下りて行くと、その雑多な影絵の中に吸い込まれていく。かと想えばまた別の男の足が

せかせかとその階段をのぼって建物のなかに消えていった。一日に何度それがあつたかな。

まあ外と内と、世界はどちらも良くも悪くも悪くなかった。母親のそばに居たつてたいしいいいことはなかったからな。なんか死んだみたいな女だったと今でも想う。寝台に半身を起こして背中を向けて、俺が見ている前で膝を立て、なにかの処理をしていたこともあつた。男たちが女の中に遺していったものを拭い取っていたんだと思う。

腐つたような日々。

時々、母親は何かの呪文を呟いていた。母親にそれは何かと訊くと、地獄に行けという意味だと教えてくれた。よく覚えているんだ。そこだけが

切り取られたように鮮やかに。

まだ若い女だった。それでもないか？ ガキには女の年齢なんて分からないが、客は多かつたから勝手にそう想つてる。

アツカーマン……

まただ。また母さんがそれを口にしている。見上げるとそんな時の母親は苦しそうに胸を押さえているんだ。自嘲なのか悔りなのか、自分自身に呪いをかけるようにして母親は男たちが触れていった身体を布切れで擦るようにして清め、終わると身を伏せて、その呪いを口にする。

通りで声をかけられた。売春宿のおやじだと気づくのにはだいぶかかった。

あんたりヴァイだろう。やっぱりそうだ。こんなになっちまって、クシエルが泣くぞ。

クシエル。そういえばそんな名だったかな。母親は母親で名なんてないと思ってた。売春宿の元締めは上から下まで俺をじろじろ眺めると、軽蔑したように云った。

「クシエルは働きづめでな、妊娠していることも分からなかった。

気がついた時には手遅れで生むしかなかった。お願いします、と頭を下げて頼むんだよ。お願いします、後でもつと働きますから生ませて下さいって。しようがないから生ませてやったよ。十日後には客を取るという約束もクシエルは守ったよ。あの女は病気がないのかと客からは苦情が来たが、ちよいと変わった身体の女も珍しいでしょうとわしが宥めてなんとかしてやったんだ。

甲斐がないねえ、あんな想いまでしてお前さんを生んだのに生まれた子がこんなこと

になるとはね。今からでも遅くないからわしの店で働いてはどうだ。どのみち、大きくなったらいずれは娼館で使つてやるつもりで生ませたガキだ。母親が病気になった時には死ぬまでおいてやったじゃないか。普通なら追い出すところだったのだぞ」
うるせえ。殺すぞ。

「なんだその眼は。お前このままじゃ一生どぶねずみのままだぞ」

娼館のおやじがまだ何か云つていたが、俺は無視してそこから離れた。

娼館の小僧になつて炊事洗濯掃除にこき使われるくらいなら、どぶねずみになつて街を這いまわつてるほうがまだましだ。生息する場所が内か外なら、外がいい。

客が出ていくたびに、クシエルは大きなため息をついてふらつきながら立ち上がり、寝台からはがした敷布を廊下に出して、新しい敷布に変えていた。いつまでああしてあそこにいるつもりだったんだ。死んだから訊けないが。

「見ろ」

時々、街の連中が空を仰ぐ。何かがぶつ刺さる金属音がしたと想像ば、真昼の頭上を流星が飛んでいく。人が飛んでいる。翼のように緑のマントを翻して、さつと過ぎていくんだ。

そのうちあれが何かを知った。飛ぶ方向に錨をぶちこんで、そこに巻き取られるようにして飛んでるんだと分かった。お陰で街の高い建物の壁はやつらが打ち込んだ錨で

疵だらけだ。

空を飛ばやつらの見分け方も教わった。徽章に薔薇と一角獣と翼の区別があつて、たいてい街の中を飛んでるのは一角獣だ。あれを見たら、俺たちは姿を隠さなくてはならない。捕まると救貧民院か何処かに連れていかれるということだった。

駐屯兵団の薔薇はあんまり見たことがない時々貴族らしき連中が街に出てきた時にまわりにうろちよろししてる程度で、関わることはない。調査兵団の翼はもつと見たことがない。俺がどぶねずみだったら、調査兵団のあいつらはさらに悪い存在だ。

門が開くぞ、調査兵団が帰ってきたぞという声に、見物に行つたことがある。大抵はぼろぼろに傷ついていて、馬車がひく後ろの荷台には沢山の仲間の遺体を積んでいた。誰もがおし黙つて俯いていやがるんだ。惨めな敗残者。

戦わずして負けるのは惨めだというが、俺にはそうは想えなかつた。あいつらは戦うことでより一層、惨めになっていきやがる。何を好きこのんで調査兵団なんかになつたのかは知らねえが、巨人の調査をしているのださうだ。

巨人がせつかく外にいるのに、わざわざ大金を費やして殺されに行つていようなものだと街の人々は苦々しく連中のことを噂していた。

またこうも云う者がいた。巨人の徘徊する外の世界に出て行つてぼろ負けして帰つてくるだけの存在があることで、俺たちは外の世界には

行かないようにしようと心を引き締めることが出来る。あいつらはそのための役割を負っているのだと。

惨めなやつらはさらに惨めなものをみて、留飲をさげる。俺もそうだ。ただ俺の場合には惨めなものをみて下げる留飲のそのさらに下があつて、

古井戸の底のようなそこにはいつも女がいた。

お前、女の中でも最低の最下層のさらに下じゃないか。何やつてるんだ、そんなところで。俺は女を見つめている。もつとましな生活や仕事がないのかよ。

俺は井戸を覗き込む。女は俯いてこちらを見ない。母さん。

ある日、また金属音と煉瓦が欠ける音がして一角獣のあいづらが下街にやってきた。さあつと飛んで来た緑の翼で汚れた街路に舞い降りると、

剣を抜いて連中は辺りを見廻しはじめた。俺はいつものように仲間と一緒に裏道に隠れた。

「いたぞ」

こちらに探しに来る気配。走って逃げながら、

「お前ら、何かやったのか」

仲間のひとりに訊くとふるふるすると首を振る。一角獣の憲兵さまが俺たち子どもに何

の用だ。相談してゐる暇もなく、俺たちは蜘蛛の子を散らすようにして散会した。

下町で生まれ育つと誰もがそうだが、道とは思えないような道や抜け道とは思えないような抜け道に詳しくなる。たとえ初めて来た街でも、俺たちは逃げ道を嗅ぎ分ける。本能に刻まれてゐる。

道から道へとすり抜けることで、大人と走つても俺たちは勝てる。特に俺は他のガキどもに云わせると「すごい」のだそうだ。何がすごいのかは分からないが、短刀を投げても扉から飛び降りても、年長の子どもよりも俺のほうが上達が早かつたし、身体もやたらと頑丈なような気がする。

見た目が細くて小さいからな。俺のことを舐めてくるやつは大勢いた。だが俺がそいつらと喧嘩してみると、俺が勝つ。腕つぶしも経験もどうみてもあつちが上なのに俺がのしてしまう。それに、俺には教師がいて、そいつが短刀の使い方や脅し方を俺に教えてくれた。

そいつのことは想い出したくもないが。

アツカーマン……

地獄へ行け。どうやら俺はあの女に呪いをかけられているらしい。

壁を蹴つて跳ね上がる。泥棒避けの硝子が埋め込まれた扉の隙間に手をかけて、宙で一回転して向こう側に降りた。一角獣のやつらは俺の姿を見失つて、袋小路で立ち止

まっていた。

「何処に行った」

塀の向こうで騒いでいる。他のやつらはうまく逃げただろうか。なぜ子どもたちが憲兵に追われているんだ。

降り立ったところには花が咲いていた。民家の庭の花壇に落ちたらしい。

「あら、まあ」

ばばあの声がした。振り返った。

「あなたなの」

老婆は眼を丸くしていた。痩せた雌鶏みたいなばばあは手にした鉄の鋏を握り締め直した。花を摘む時に茎を切るようなあれだ。

長居は無用。

「お待ちなさい」

憲兵団が別の小路を探しに立ち去ったことを気配で知って、また向こうに塀を乗り越えて戻ろうとした俺を、老婆は引き留めた。

「お花を直して行ってちょうだい」

「どうやって直す」

「折れた花は仕方がないわ。だけど踏み荒らした土くらいは元通りにしていつて」

手編みの毛糸の肩掛けを肩にかけた細っこいばあは思いがけず厳しい調子で俺にそう命じた。何かそこには逆らえないものがあつた。後で知つたが元教師だそうだ。

「ちっ」

塀を乗り越えて俺が下りた処は花が倒れて土が荒れていた。仕方なく足でぎくぎくと踏み固めて、適当にならした。

「これで、いいだろう」

「よくないわ」

老婆だから油断したのか。塀に頭をぶつけたと想つたら、俺の首には、ばばあの手にした鉄鋏の先端があてられていた。さらに鋏の先が開いて

金属が俺の頸を両側から挟む。

「待て」さすがに焦つた。鋏を凶器にされるとは予想外だった。

「あなたなのね。憲兵団が探しているのは」

老婆は俺の頸に鋏をあてたまま、近くから俺を見つめた。そして云つた。

「小さいわね。とても人を殺した子どもとは想えない」

「俺じゃない」

「あらそう。でもあなたよ」

老婆の腕をへし折るなんて簡単だ。やるべきか。迷っているうちに、

「物騒なばあは皺の寄った唇を動かして、俺を愕かせた。だって、あなたは、アッカーマンでしょう」

（中篇へ）

Levi (中篇)

Levi (中編)

夢の中で俺は短刀を取り出して、何度もそいつを殺っている。獲物の屠り方は一撃でやるものだといつに教わった。しかし俺は俺にそう教えたそいつを何度も何度も刺している。そいつは死なない。腹を刺し、胸を刺しても、そいつは起き上がってくる。にやついた嗤いと人を見下したものの云い方。お前は母さんの何だ。

俺は老婆の手にした鉄の鋏を両手で握った。頸を挟んでいるそいつをばばあに向かって押すのではなく、俺の方に引き寄せる。

「あらあら」

ばばあがよろめた。少し頸を掠めたが俺はしやがんで、刃を逃れた。

早く逃げるぞ、こんな処は。

「危ねえー」

伸びあがつて壁に手をかけようとした俺に、ばばあは鋏を投げてきた。避けてなければ背中に突き刺さるところだ。

「何をする」

「行こうとするから」

「憲兵でも何でも呼べ。俺は行くぞ」

「あなた、捕まるわよ」

「なぜだ」

「人殺しだもの」

俺はばあを振り返った。子どもが市民の誰かを殺したのか。それで

一角獣のやつらが下町に入ってきたのか。

「娼館の主が殺害されたのよ」

「俺じゃない」

「憲兵団の人はそうは云っていないかったわ。下手人はアツカーマンだと囁いているのを

きいたわ」

「そいつは俺じゃない」

にやついた嗤い方をする男が脳裏に浮かんだ。アツカーマンという単語とあいつと母親は繋がっていて、渾然一体となって俺につきまとう埃だった。俺は人殺しじゃない。

ただ、娼館の主が殺されたという点に引っかかった。

「何処のだ」

「どこの娼館の主が殺されたのかと訊いているのかしら」

婆さんは教えてくれた。知らない店だ。もう一つ気になることを俺は訊いた。アツカーマンとは何だ。

「アツカーマンは王に反抗して追放された護衛の一族だったと想うわ。詳しくはわたしも知らないの。ただその一族は今でも深く怖れられていて

強大な王の力も、その血筋のものには効かないのだとか」

婆さんは塀を振り仰いだ。泥棒よけの硝子がきらきらと反射していた。

「ねえ。あなたには造作もないことなのでしようけれど、普通の人はあんな高さの塀を乗り越えられないのよ。大人でも無理。その小さな身体にどんな力が宿っているのかしら」

「もう行く」

「面倒は避けたほうがいいと想うわ」

老婆は腰をかがめると、花ばたけに落ちている鉄鍬を拾いあげた。

「憲兵団の検挙率が下がっているから、彼らは必死になっているそうよ。おちびさんを片っ端から捕らえて兵舎に入れておきくわ。あなたが犯人でないのなら、もう少しここに居たらどうかしら」

どうやら俺はおせっかいな女の気を引く何かがあるらしい。がりがりに痩せた子どもを見ると街の女たちは眉をひそめながら、それでも小銭を手渡しで寄越してくれたものだった。

いつもなら俺はすぐに立ち去っていたと想う。だが俺は老婆の言葉になんとなくつられて、その家に留まることにした。家の中からいい匂いが

していたからだ。食事はありつける時にありついておく。これは路上生活者には鉄則だ。

あいつら上手く逃げたかな。

俺は仲間のことが心配だったが、婆さんに誘われるままに婆さんが一人で暮らしているという古びたその家に入ってしまった。

「兵長」

酔っぱらった部下が俺をからかって絡んできた。酒臭い息。

「兵長の初体験はいつですかー？」

「うるせえな」

俺は相手にしない。宿営地にはワインまで配られていたが、俺は紅茶を呑んでいた。

「教えて下さいよ。兵長の初体験はいつですかー？」

深酔いした部下はいつまでもその問いを繰り返した。そんなに人は他人の初体験が知りたいものだろうか。

俺の初体験を語るなら、路上のガキどものそれを語るのと大差ない。男に掘られることもなく相手が女だっただけまじしという程度だ。身体のでかい女はダメだ。苦手だった。俺が小さいというのもあるが、なんとなく母親に抱かれているような気持ちになつて無理だ。もし俺がちゃんと母親と死別が出来ていたらそうは想わなかったのだろうが、いつまでもそこには乗り越えられない何かがあつた。

だから俺のはじめての相手は俺と同じくらいの背丈で俺と同じくらい痩せた娘だった。娘のほうから誘つてきてやつてみた。お互い痩せていたから骨と骨がぶつかつていた印象しかない。

「悪いな」と云つたら「私のほうこそ」と娘は身を起こして、お互い気ますぐなつてそれきりだった。

半年後、娘が商家の少年と歩いているのを見かけた。良かったなという眼で見送つたら、娘は小さく手を振つて応えた。

まあ、どんな女でも、俺の母親みたいなことになるよりはましだろう。

兵団には女もたくさんいたが、調査兵団なんかに入ってくる女はどんな堅気の生まれの女でも、どこかに殺る気を秘めている。勇気じゃない。

自暴自棄とも違う。うまく喰えられない。ちよつとした中毒かもしれない。ぎりぎりまで削いでけずっていく命の輝き。宝石を研磨するようなものだ。そいつらとは馬が合った。女たちも俺によく従ってくれた。俺はそいつらが俺の部下である限り俺の女でもないのに護つてやる。

おちびさん、と婆さんが俺を呼ぶのが閉口で、俺は名を名乗った。

俺はその婆さんの家でしばらく匿つてもらうことになった。成り行きとはいえ無銭飲食は気が引けたので、俺は婆さんに云われたわけでもないのにすすんで家の掃除をした。家は婆さんと同じで小奇麗にしてあったが、細かいところまで見ると年月の堆積があるものだ。

「きれいい好きなのね。すつかりきれいになったわ」

婆さんが褒めてくれた。

俺はきれいい好きらしい。寝台の上で腐りかけていく女を眺めていたせいかな、あの腐敗がどこか俺の中にも残っている気がして、何度も手を洗ったり、何度も雨の中で身体をこすつたりしていたものだ。行き過ぎた強迫観念はようやく収まってきていたものの、それでも些細な汚れが眼に入ると、我慢できなくなってしまう。

「自分の名前くらいは書けたほうがいいわ」

婆さんは俺に字を教えてくれた。看板や通りの名などの簡単な字なら記号を記憶するようにして覚えていたが、そういえば俺は自分の名を書いたことがない。

教師をしていたという婆さんは初等科の教科書を使つて俺に文字を教え始めた。まあ難しくはない。とにかく基本だけ憶えてしまえば、あとは組み合わせでそこそこ読んだり書けたりする。

「娼婦つてどう書くんだ」

俺が訊くと、婆さんは理由も訊かずにさらさらと筆を走らせてその綴りを教えてくれた。

「世界中、何処をさがしても最初に自ら知りたい綴り方がそれという子どもはいないわね」と婆さんは面白そうにしていた。

子ども向きの絵本みたいなやつを何冊か婆さんから渡されて、俺は音読をさせられた。世界は海に囲まれておりました。その海を渡つて巨人が現れました。人類は巨人から身を護るために高い壁を築き、そこに立てこもりました。巨人から人類を護る壁には古代の王家の三人の王女の名がつけられました。いにしえの王女たちは今も人類をおそろしい巨人から護っているのです。

「海とはなんだ」

「絵のとおりよ。大地が全て水なの。川や運河とは違うわ」

「どうやって巨人がそこから来る」

「泳いで」

沈むだろうと想ったが、ほら吹き婆はやけにきつぱりとそう断言した。いいえ、巨人は泳げるのよ。

俺は巨人を観たことがない。実在しているかどうかも疑わしい。だが時々調査兵団がずたずたにされて壁の向こうから戻ってくるところをみると、いるにはいるらしい。壁の中の平安。

「ここを」と婆さんは俺の瘦せた首の後ろを指し示した。

「ここを斬ると倒せるというわ。だから立体起動装置が生み出されたの」

立体機動装置とはあれか。あの、俺たちの上をびゅんと飛んでいくやつか。

朝は麦わらで編んだ帽子をかぶらされて、庭で庭しごとを手伝った。野菜も作っていたから水やりが大変だった。老婆の代わりに水を汲んで如雨露で何度も水を遣った。

「大人の男性と変わらなくらいの力もちね」

「アツカーマンだからだろう」

「いつか仲間に逢えるわ。その一族はいまもまだ王都にたくさんいるのよ。」

「隠れ潜んで暮らしているというわ」

「隠れ潜んでいるのなら、生きていても息をしてないのと同じだ。」

「そうだわ、あなた、もう少し大きくなったら訓練兵団に入るといいわ。その能力がもつたないから」

「訓練兵団」

「背中に交差した剣のしるしがあるのよ。普段は訓練兵として郊外にいるの。訓練期間が終わったらそれぞれ、駐屯兵団、憲兵団、調査兵団に分かれるのよ」

「興味ねえな」

俺は人參を地中から掘り起こして、土を払い、籠に入れた。

街の娼館の主がまた殺されたという報がとびこんで来たのは婆さんの家に寄宿してから一か月ほど経った朝だった。

「これで三人目だよ。物騒だから、あんたも戸締りに気をつけてな」

牛乳配達の方が婆さんにそう云うのを、俺は玄関の隣りの二階に上がる階段の下の小部屋に隠れてきいていた。片側は外壁とくっついていて階段の下だった。納戸がわりに使っているその室には、主に庭仕事に使う道具が納められていた。鉄の鋏、鋤やくわ。娼館の主を殺して回っている誰かとは誰だ。下手人が子どもとはとても想えない。娼館の主を殺して回っているそいつを追えば、俺はまた仲間逢えるのか。仲間だけじゃない。犯人がアッカーマンなら、俺はアッカーマンの一族に逢えるのか。

庭鋏を見つめながら、俺がそんなことを考えていた時だ。

「出てこないで」

婆さんが叫んだ。そして俺のいる階段の下の納戸の扉に、婆さんが外から鍵をかけてしまふ音がした。

「おい」

俺は扉に駆け寄って開けようとしたが扉は存外に頑丈で開かない。

「おい」

「この家にはわたしの他に誰もいないわ」

婆さんが大声で云っているのが聴こえた。俺に云っているのだ。

俺は音を立てるのを止めた。

(後篇へ)

Levi (後篇)

Levi (後篇)

想い出すのも疎ましいが、そいつは確かに俺の方向性を固めてくれた。俺みたいな生まれの者に施されるには上等な教育だったといえる。掃きだめでも独りでも生き抜く技と力。

街のやくざ者を返り討ちにして脅し返している俺を見て、そいつは帽子をかぶり直して何処かへ行ってしまった。訊きたいことがあったが、その時の俺はあまりにも子どもでそのことに想いあたらなかった。母親の傍で死にかけていた俺に飯をくわせ、短刀の使い方を仕込んでくれたあいつ。あいつは俺の母さんの何なんだ。

「男だろう。懇意の」と仲間は云ったが、なんとなくそうは想えなかった。母さんとその男がそんな仲なら、足しげく通ってきたはずのその男を

俺も覚えていただろうから。

「ここに居たのか」

「出て行って」

老婆が誰かに厳しく云い返していた。そんな騒動が扉の向こうから聴こえた。俺は

扉に耳をひつつけて外を窺った。鍵穴に眼をつけても何も見えない。納戸の中を見廻した。鍵を壊す何かがないか。

剣の音がした。家まで揺れるような音を立てて、何人かこの家に押し入ってきたようだ。

庭のほうからも足音がした。俺は反対側の壁にとんで行って、そこら辺に積まれている荷に足をかけて登り、納戸の上部にある横に細長い採光窓から庭側の外をのぞいた。

一角獣。憲兵団のマントだ。

「畜生」

どういうことだ。憲兵団が、慎重しく暮らしている無害な老婆の家に乱暴に押し入ってくるなど考えられない。ということはあいつらは偽物なのか。憲兵団のふりをした強盗団か。それとも俺が此処にいるからか。

迷いは一瞬にして消えた。婆さんが襲われている心配がしたからだ。何かが納戸の外で起こっている。

痩せているちびで良かったとは口が裂けてもいいたくないが、その頃の俺は今よりもっと、ちびでガリだった。

庭仕事に使う鋤で窓をぶち破った。何度か硝子を突いて大きな破片をとばすと、俺は突き刺す破片に構わず窓に開いた隙間を乗り越えて、外の庭に降りた。

「子ども」

憲兵団が駈けてきた。剣を抜いていやがる。しかもそいつは女の兵士だった。

一撃だぞ。おちび。

忌々しいあいつの声がする。おちびなら尚更のこと初動が大切だと云っている。初弾でかましてしまえ、びびらせろ、相手が女ならな、まず顔を殴ることだ。いやいや俺だってやりたくはねえさ、さすがに女の顔を殴るなんざ外道が過ぎる。

だがな、命がかかっている時にはやるしかねえのよ。女と想って侮ると迷っているうちに殺られるからな。殴るのは顔だ。おちび。それで大抵の女は怯む。

「嘘つけよ、ケニー！」

俺は恨みの声をあげた。顔を殴っても女はまったく動じず、猛然と殴り返してきたからだ。俺は軟弱な痴漢ではないし、女はど素人じゃない。こうなるのは当然といえた。

とんぼ返りして俺は女兵士の剣を避けた。俺の二撃めも女は腕を立てて防いだ。防いでおいて俺の腹を蹴ってきた。訓練されている。

女兵士と俺のあいだには、先ほど俺が窓を破るのに使った鋤が落ちていた。女もそれに気づいていて鋤を取り上げようととびかかる。俺が早いか女が早いか。こいつは女だが人を殺めることに躊躇わない兵器だ。

鋤に手をかけた。女兵士がその鋤の上に片足を乗せる。女の剣が俺の頭上で閃いた。

俺は鋤から飛び退いた。

「この家にいるということはお前を殺す理由になる」

女兵士の声は鋼鉄のようだ。こいつは本物の憲兵団の軍人だ。婆さんがいる家の中からは凄い音がして、どう聴いてもそれは剣と剣が絡み合う音だった。何が起こっているんだ。

そういえば、婆さんがおかしなことを云っていた。

この家に、人を匿うのは、あなたで二人目。

俺を見る女兵士の眼がすわっていた。これが憲兵団なら、街の人たちが云うところのただ飯喰らいの調査兵団の腑抜け共とは確かに筋が違ふようだ。

「わたしは命令に従う」

相手が子どもでも容赦しない覚悟をこめて、女兵士は俺に向かってきた。

「憲兵団に入団する時にそう誓った。我らは街の治安を護る」

「俺たちが何をした」

女兵士は応えなかった。剣が風を切る。女は笑った。

「なるほど小さくても力は十分というわけか。危険だな」

女が笑ったのは俺が女の間合いに飛び込んで、女の腰帯にある短剣を奪ったからだ。奪ったと想った時には片腕で投げ飛ばされて、ひっくり返されていた。

女は倒れた俺の身体に上から乗ってきた。身体のかな女は苦手だ。埋もれるような気分になる。

俺は多分、他の連中よりも強いのだろう。それを疑ったことはない。だが俺が今まで相手にしてきたのは所詮は街の愚連隊で、心身を極限まで

鍛え上げている本物の兵士と闘ったのはその時がはじめてだった。

「リヴァイ」

家の中から婆さんが呼んでいた。助けを求めているのではない。なぜかそれは俺を励ましていた。俺の中の何かが婆さんに応えようとしている。俺は婆さんの声に俺自身を呼び起こしていた。未知の感覚。

「戦いなさい」婆さんがまた叫んだ。

戦え。

どうやって女兵士を斃したのか覚えていない。ともかく俺は女の剣を浴びることもなく勝ち残り、庭にひとりで立っていた。女から奪った短刀をふるったつもりだったが、絡み合っているうちにどうなったのか、俺が女を斃した武器は短刀ではなく庭から咄嗟に掴んで手にした石だったようだ。石は女兵士のこめかみを陥没させていた。

女兵士は死んではおらず、昏倒しているだけのようだった。

俺は血のついた石を庭に捨てた。そこから近い裏口の戸が開いたままになっていた。俺は裏口から家に入った。

今朝、丁寧に掃除したばかりの廊下に血を流して兵士が倒れていた。一人、そこにもまた一人。憲兵団が計三人。

庭で倒した女兵士を合わせて五人でやってきた憲兵団の最後の一人を相手に、婆さんは台所で闘っていた。俺の足許には二つに折れた剣が転がっていた。

静脈の浮き出た枯れ木のような細腕に料理で使う刃を握り、婆さんは男と対峙して、きらりと静かに眼を光らせていた。婆さんのその眼つきと

同じものを見たことがあった。跳びかかって獲物の鳥を捕まえる直前の猫の眸だ。

「おいおいおい」と俺の中のあいつが廊下を見て呆れていた。

「これ全部、婆さんがやっちゃったのかよ」

「婆さん」

眼にも止まらぬ速さというが、まさにそんな感じで婆さんの身体が沈み、兵士の剣を避けて兵士を襲い、跳び退ってはまたぶつかりあっていた。

絡み合う剣と刃。鋭い音がして火花が散った。加勢しようとした俺を婆さんが制した。

「呪われた一族め」

長靴の音を激しく立てて老婆に襲い掛かりながら男の兵士が叫んだ。一角獣の徽章が翻った。

「王命により、始末する」

「リヴァイ、よく見ておきなさい」

男よりも婆さんのほうが息が乱れていなかった。

「これが私たちアッカーマンの闘いです」

巨人から怯えて暮らす呪われた人類の、さらに呪われたその血族。老婆にはあり得ないほどの力強い動きで婆さんの身体が男の兵士にぶつかっていく。男兵士も婆さんの身体へ体当たりしていった。男の剣を婆さんの刃が止めていた。婆さんと兵士の力が拮抗する。

からからと音を立てて、料理用の刃が俺の許にまで転がってきた。婆さんは倒れた。男兵士の方も傾いて、片腕を調理台についていた。

「よくも」

俺は転がり落ちてきた料理用の刃を掴んだが、その前に男兵士の身体が床に倒れていた。倒れてきた男兵士を俺はよけた。仰向けに倒れた兵士の胸には、今朝まで俺がこの台所で使っていた野菜用の小さな刃が柄まで突き刺さっていた。

見てみな、おちび。とあいつが俺の肩を叩いた。あの婆さんは利き手で刃を扱いなが

ら、もう片方にあれを隠し持っていた。

それで兵士の胸を下から刺したのさ。

刃を捨てて俺は婆さんに駆け寄ったが、婆さんはもう駄目だとすぐに分かった。何度かこうなる人間を観てきたからだ。

俺は婆さんの傍らに手をつき、婆さんに呼びかけた。老婆はまばたきした。それから喉を鳴らした。毛糸の肩掛けはどこかに失せていたが、婆さんはほとんど返り血を浴びていなかった。手練れほど返り血を浴びないというが、三人の兵士を相手にして見事なものだった。

「婆さん」

「アツカーマンは、隠れ潜んでいるのよ……」

婆さんの眼から光が消えて、息がとまり、心臓も止まった。

その家から出て行く時、俺は玄関から門をとおって表から出て行った。誰かに見られても構わなかったが、通りには誰もいなかった。

憲兵団の小隊がこの家に派遣されていることを憲兵団本部が知っているのならすぐに、たとえ来なくても、明日の朝になれば牛乳配達のおやじが家の中の遺体を見つけることだろう。

いつも仲間が群れている路地の奥や残飯処理場に使われている飲食店の裏手を覗いてみたが、誰もいなかった。みんな憲兵に引つ張られて兵舎に連れて行かれたのか。

仲間が消えた街は廃墟のようだった。運河に沿って歩いて行つたが街の外れでも知つた顔には誰にも逢わなかつた。

広場の噴水で顔を洗つていた時だ。おーい、と声がかけられて仲間があちこちの通りから走つてきた。その様子は、俺もその一員ではあるが、まさに溝からねずみが這い出してくるのにそっくりだった。

「お前ら」俺は手から雫を振り落としした。

「無事だったか」

「犯人が捕まつたんだ。だから解放されたよ。娼館の主を殺して

回つていたのはアッカーなんとかという何かで、そのアッカー何とかは

昔そこで働いていた娼館を恨んで、娼館の主を殺して回つていたらしい」

仲間は口々にそう云つて、兵舎を出される時に配布されたという焼きたてのパンを俺にも分けてくれた。

「子どもと想われていた理由もわかつた。そいつが女だったからだ。

頭巾をかぶつた小柄な後ろ姿が子どもに見えていたんだと」

「アツカー何とかは危険だと聴いていたけど、本当なんだな」

「アツカー何とかじゃない。アツカーマンだ」

落ちぶれた一族。王都に隠れ潜んでいるその一族を片端から憲兵団はあぶり出していき、今日、老婆の家にもやって来たのだ。

「俺がそのアツカーマンだ」

そう云つてやると仲間は眼を丸くして、「えっ」と絶句した。

それから俺は婆さんの家の前を何度か通った。通るつもりはなかったが、気が付いたらその前に来ていた。

殺しがあつた家は取り壊されてしまい、しばらく更地になっていたが、やがて基礎工事がはじまり、三階建ての共同住宅が建てられた。

婆さんの庭も潰された。敷地いっぱい建っているその共同住宅を眺めながら、俺は婆さんの遺した言葉を想い返した。

隠れ潜んでいるとは、何故だ。何故そんなことになった。俺たちの血が人よりも強く、強靱であることは、王家にとってそんなに都合が悪いことなのか。俺たちを召し抱えて護衛にした方が王家にとっては利があるんじゃないのか。

「それはお前、そんな近くから反逆でも起こされてみるよ。剣を向けられたら護衛の強者でもアツカーマンには太刀打ちできないだろうが」

そう云うものもいた。そうなのかもしれない。

老婆は、家に匿つたのは二人目だと云っていた。過去にも何度か似たようなことがあつたのだろう。その度に迫害された俺たちの一族は虫けらみたいにこの壁に囲まれた街の中を逃げ回っていたのだろう。

母親が呪っていたその意味が少し分かるような気がした。這いあがれない残酷の底に俺たち一族は生きている。だがそれが何だというのだ。

地獄へ行けというのなら、俺は行こう。

婆さん、あんたがそこにいるのなら、俺はそこまで降りて行ってやる。そこにいるのは、クシエルかもしれないし、他の誰かかもしれない。井戸の底の黴くさい不潔きわまる陰にまで、俺は降りて行ってやる。

云ってくれ、俺にそうしろと。

誰かがそう命じてくれたら、俺はそうする。そこにはあのにやついた男もいるんだろ。アツカーマン一族という腐敗が煮えたぎっている。

「リヴァイ」

ああ、あんたか。俺は待っていた。お前みたいな男が俺の前に現れて、俺を壁の向こうに連れて行ってくれることを。俺がここが底だと想っていた底辺のさらに底にお前は降りていく。

「夢をあきらめて、死んでくれ」

その男に俺は告げる。当たり前だ、俺を地獄に連れて行く男がいるのなら、そいつは俺よりさらにその下の地獄にいて、俺の手を下へ引つ張らなきゃならないからな。

地獄の井戸の底から俺は仰ぐ。空は円い。ひゅんと音を立てて、はるか上空を何かが飛んでいく。青空を背にした自由の翼。そうなのか。

あいつらはあそこを飛んでいるのか。

ずいぶんという処を飛び回っているじゃないか。

そして太陽に照らされた白い雲がまぶしく眼を灼く。男たちが出て行った後に取り換えられる白い敷布みたいな大きな雲だ。脚を広げて女は男たちが通り過ぎるのを待っている。そのたびに女は白い敷布を取り換えて、自分の肉体を取り換えようとしている。あの流れる雲みたいに流れて去りたいと、窓から挿し込む光の筋に疲れた顔を向けている。この血を棄てられるのであれば、そこが地獄でも安んじて受け入れると。だったら俺はあんたも連れてそこへ行ってやる。

「兵長」

誰かが俺を呼ぶ。生者も死者もいる。鐘が鳴る。巨人が来る。

「今最高にかっこつきたい気分なんだよ」

巨人を愛した莫迦な女が粹がる。もうあの女は、そっちにいるのか。あいつもそこへ

逝つたのか。そんなに悪くない。地獄はそんなに悪くない。

俺は飛ぶ。真つ逆さまに飛んでやる。これは悪くない呪いだ。俺に綴り方を教えてくれた婆さんもそう云つていたではないか。俺はその文字を見て、そしてその文字に刻まれた呪いのおりに生きてやる。巨人を討伐する数の分だけ、俺はそこに近づいていく。太陽が眼に入った。眩しすぎて昏くなる。

「リヴァイ・アツカーマンとは、こう書くの」
地獄へ行け。

「了」